

# 美術系大学生のための科学教育—私の試み

高木 隆司  
東京農工大学名誉教授

## I. 導入—私の美術とのかかわり

### 1.1 幼児・小学生のときの思い出

私は、1940年に広島市で生まれました。終戦時（1945年）は、広島市の東方20kmのところにある熊野町に疎開していたので、家族ともに無事でした。原子爆弾が落ちたときのことはかなりよく覚えています。朝8時ごろ大きな音が聞こえたので外に出てみたら、広島市との間にある山の上に原爆の雲が見えました。これは、いまでもよく覚えている風景です。

ところで、幼児の頃の風景の記憶は、後で自分で作りあげることがあることを聞いた覚えがありました。そこで、今から30年くらい前、ある用事で広島市に行ったとき、熊野町の自分が住んでいた場所に行ってみました。そのとき、広島市の方向に見える山が記憶の中の山と似ていたのも、自分の記憶は本物だと実感した次第です（図1.1参照）。ところで、私には原爆の爆音の記憶がないのです。熊野町でもガラス窓が割れたという噂があったくらいで、少なくとも音は聞こえたはずですが。人間の記憶には、このような不思議なことがあるようです。

原爆の雲については、もう一つ思い出があります。それは、30年くらい前にアメリカの東海岸を旅行していた時、ワシントンのスミソニアン博物館で原爆に関する展示をやっていることを知り、見に行きました。この展示には、多くのアメリカ人が反対したそうですが、結局規模を縮小して実施されました。しかしながら、被爆者の写真などもあり、原爆の悲惨さは十分伝わったと思います。展示の中に、原爆の雲が上ってくる様子を戦闘機側から撮影した映像がありました。私は、この雲を地上から見たことを思い出し、大きなインパクトを受けました（図1.2）。



図 1.1 著者の記憶による原爆の雲（高木描画）



図 1.2 原爆展で見た原爆の雲の映像（高木描画）

私は、小学1年生（終戦2年後）のときは熊野町の小学校に通いました。その時について覚えていることは、私を含む3人が授業終了後に書道の指導をうけたことです。その前に、教室内の薪ストーブのまわりで弁当を食べました。その際に熱心に新聞を読んでいた先生の姿を覚えています。戦後の日本について気になっていたのでしょう。

私の家族は、私が2年生になったとき広島市に戻りました。そのときには、市内はかなり復興していました。

小学生の時の私の得意科目は、理科と図画工作（現在の「美術」に相当）でした。特に、小学3、4年生の時の担任教師が美術を専門にしていたので、ときどき個人的に指導をしてくれました。3年生および6年生の時に描いた絵を、図1.3、図1.4に示します。

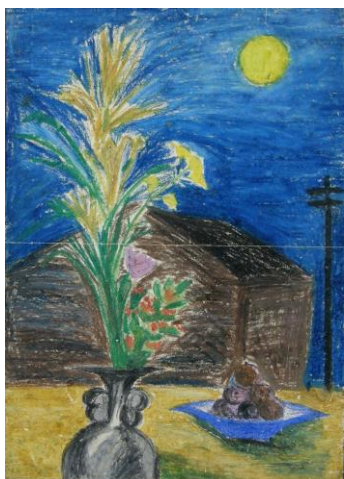


図 1.3 「月見」クレパス画（3年生）



図 1.4 「静物」水彩画（6年生）

今見てみると、これらの絵は、器用に大人のまねをしたのであって、美術の本当の才能を示してはいないように思います。むしろ、年齢相応に子供っぽい絵で、しかもその中にきらりと光る魅力が含まれていれば、それは本当の才能を示すのではないかと思います。私については、中学生の時に美術の成績が優良可の「可」まで落ちて、高校3年生の時にやっと「優」まではい上がりました。このようなわけで、常に美術には興味がありましたが、自分がその道に入るという意識は完全に消えていて、理系の物理学の分野に進んだというわけです。